

## コロナ禍で見えてきたもの

新型コロナウイルスの大流行という「非常」事態が一年も続くと、これまでの緩慢な「日常」の中では意識されることのなかったことがかえってよく見えてきます。これまで学校教育は、社会の急激な変化や社会のニーズに十分応えられていないなどと、激しい批判の対象とされてきましたが、ここに来てその存在意義が改めて浮き彫りになってきたように思われます。

まずは一斉休業という状況下で、保護者は子供たちが一日中家庭にいることに日ごとに「疲労感」を抱くようになってきました。続いて、Webによる授業が始まると、子供たちがWebによる長時間の学習に耐えられないこともわかってきました。教室で日常的に行われている学習がいかに子供たちのモチベーションに配慮されているかということも、子供たちが対面して共同で学ぶことの価値についても改めて気付いた保護者も多かったようです。さらに、多様な学校行事や部活動など教科学習以外の活動が子供の成長にどれだけ寄与しているかについても、学校が機能不全に陥った途端にその価値が理解されるようになったのはある意味皮肉なことです。歴史的に見れば、近代の産物である学校教育は、「公教育」の場として私的な領域である家庭から機能分離したわけですから、今さら家庭が学校教育の果たしてきた機能を全面的に引き受けることなど困難であるのは言うまでもありません。

このように、様々な活動が組み合わせたり、その中から複合的な学びが得られるのが学校という場です。そこは、子供たちが効率的に知識を獲得するにとどまらず、様々な「他者」や学びの機会に出会うことによって、それぞれの生き方、課題への対処の仕方を体験的に学ぶことのできる希少な場です。このような場において「個体」としての子供は、「人間」としての社会性を獲得していきます。社会性とは、詰まるところ人間関係を構築する能力のことです。身体性と実感を伴わない(直接経験に基づかない)バーチャルな学習では、このような複雑なスキルを身につけることは困難でし

小松 茂(本学教職研究科准教授)

よう。学校は、一見効率的な知識伝授の場のように見えて、その実は、教職員という大人や他の子供たちとの直接的な接触、身体経験、感情交流を通して子供たちの社会性を開発するという機能をもつ場でもあることは、今のあらためて強調されてよいことではないかと思えます。コロナ禍の中での最大の課題は、学校が担っている高度で複雑なこのような機能をどのような工夫によって保持するかにあると私は考えています。

目下、アフター・コロナ時代の教育として、教育のICT化を促進する動き(EdTech)が急速に進み始めています。子供たち一人一人にPCの端末をもたせ、周到に準備された課題に取り組みせることで、個別最適化された学びを実現することがそのねらいとされています。予め設定された内容を順次習得していく学習において一定の効果はあるとは思いますが、それは従来学校が担ってきた「学び」のほんの一部を担保するに過ぎません。このような施策の推進をベースにして「未来の学校」を構想しようとするならば、それは「学び」の内容や「学校」の持つ意義を随分と矮小化して理解していると思えます。教育を論じる際には、誰でも自己の「学校体験」に引きずられてしまうものです。今、ICTの効果的な活用を推進しようとしている政策立案者が、自己の育ちにおいて豊で多様な体験をもち、人の成長や学びの複雑性についてしかるべき知見をもっていることを願わざるを得ません。